



自愛とは薔薇に近づきすぎたる日
 小林貴子
 白夜光可惜ブロンド背の高き
 宮地良彦
 炎天に銃声末世来たりけり
 満田光生
 緑蔭に人待つ遠き日のごとく
 上村敦子
 傷だらけの空のため群れ向日葵は
 宮坂やよい
 翻車魚の寂し気な顔土用あい
 窪田英治
 瀧音に蝶湧く尾形光琳忌
 宮岡光子
 南十字星宇宙は未来より近し
 伊藤由希子
 日日草働く時は背を伸ばし
 太田 薫
 滝百合と言へば伊予路も土佐のきは
 松本よし乃
 ニタイ・トを揺るがす北の蟬の声
 荒川美恵
 みんなみんな死んじまったよ葛の畏
 吉澤利枝
 鳥鳴かぬよ炎天へ嘴開けど
 幹 自聲
 わが死後の供華とするべし不喰芋
 渡嘉敷皓駄
 最期こそみんな昼寝の時がいい
 北見弟花

*

細波は蟬の揺りかご雲は幌
 池間キヨ子
 答へより問ひを持ちたし雲の峰
 高橋節子
 浮世絵に三味線を弾く金魚かな
 竹岡みち子
 苺狩勝ちつづけねばならぬ世よ
 西澤日出樹
 昼寝覚机上のパンチ穴きれい
 市原啓子
 金の蕊内に黄薔薇の頰くすぶれぬ
 蔦原説子
 羅や芯の強さが透けて見ゆ
 谷口とし子
 草の穂がどつと喜び電車来る
 森 千恵子
 海霧や火の輪郭をもつ鴉
 岩上諒磨
 空の奥より螢火の殉教者
 青山篤司
 岳の幟赤子の名前記しあり
 田中純子
 緑摘むたび見上げたる鶯の空
 赤澤久喜

*

夜濯や明日着る服を選びかね
 宮澤朝子
 薄明のその手にもつは紫蘭かな
 二木 暖
 薔薇よりも薔薇育ててる君が好き
 菊池理津子

岳俳句の現在 九月 ⑤17

— 同人集・岳集・青雲集から

宮坂静生

巻頭寸言。円城寺龍追悼号に胸をあつくしている。龍に關しては一回の追悼では済まないの、今回書けなかった思いを長い時間の中で龍の作品を回顧しながら書いていきたい。

自愛とは——孤独な矜持

自愛とは薔薇に近づきすぎたる日 小林 貴子

秘かに喜び過ぎた思いの表現か。「薔薇」は祝福のシンボル。誰でも矜持に生きている。しかし、意識の上で、他者と比べながらバランスをとる。自己満足への反省の思いを句にしたものか。苦渋とか傷みという否定的な思いではなく、肯定的な自愛を問題視した点が珍しい。

白夜光可惜ブロンド背の高き 宮地 良彦

〈寒晴やははれ舞妓の背の高き〉(飯島晴子)のもじり句のようだ。北欧あたりの白夜の旅吟であろう。見上げるほどのブロンド美人。惜しいかな背丈があり過ぎる。作者若き日の回想句であろうか。

緑蔭に人待つ速き日のごとく 上村 敦子

を記したものの。

日日草働く時は背を伸ばし 太田 薫

戦中・戦後の地味な日日草からはもくもくと働くさまが目に見えぬ。背を伸ばすとは真面目一途。懐かしさが滲む。

滝百合と言へば伊予路も土佐のきは 松本よし乃

「滝百合」は土佐高知を代表する夏の百合。花卉の反り、鹿の子絞りに濃い紅色の斑点が際立つ。私は土佐から伊予へ旅をした日を思い、例句の少ない「滝百合」詠に注目した。

ニタイ・トを揺るがす北の蟬の声 荒川 美恵

「ニタイ・ト」はアイヌ語で森・湖。例えば釧路・根室など

今月の秀句

炎天に銃声末世来たりけり 満田 光生

ウクライナをめぐるロシアとNATO加盟国との対立や世界の覇権国家同士の緊張関係は、コロナ禍が収まらない状況を踏まえ、戦場を想像するならば「末世」。「方丈記」ではないが、これほど手近に阿鼻叫喚の世がしのび寄るとは予想もつかないことであった。

若くはない思い。しかも句品がある。いささか緊張して。

傷だらけの空のため群れ向日葵は 宮坂やよい

戦場ウクライナを思い浮かべる。向日葵は平和のシンボルと見たい。願望を籠めた句である。

翻車魚の寂し気な顔土用あい 窪田 英治

水族館か港の水揚げ場の光景。土用さなかに涼しい北風が吹くことがある。翻車魚はいつもとぼけ顔。暑い最中だけにうだめだとお手上げの顔をしていたものか。

瀧音に蝶湧く尾形光琳忌 宮岡 光子

瀧の辺は飛沫とも瀧の轟音とも、いかにも華やかな光琳好みの光景が描き出されている。光琳忌は陰曆六月二日。

南十字星宇宙は未来より近し 伊藤由希子

南十字星は『沖繩俳句歳時記』で夏の季語にあげられている。「宇宙」と「未来」という次元が違うものを敢えて比べたところがユニーク。宇宙飛行の話が頻繁に話題になる。未来ということばとは違い、宇宙は手近に感じる。素朴な実感

の蟬の声とは。素朴な句柄に力が籠る。アイヌ語の効果か。

みんなみんな死んじまつたよ葛の畝 吉澤 利枝

原句は「草の畝」。調子がいいが、季語がない。秋草の畝を想像するのは無理。例えば「葛の畝」ではどうか。八十年代後半の作者の身を切るような実感である。有季にして幼馴染を悼む思いを生かしたい。

鳥鳴かぬよ炎天へ嘴開けど 幹 自聲

炎天下、嘴を開いたまま声をもらさない鳥をみる。投げだすような表現であるが、場景把握には対象に迫る力がある。

わが死後の供華とするべし不喰芋 渡嘉敷皓駄

南国の不喰芋。その勢いは凄まじい。供華にとは驚く。作者の悟りの思いか。根茎は有毒というがなぜか茂りは気分が落ち着く。不思議なサトイモ科の多年草だ。

最期こそみんな昼寝の時がいい 北見 弟花

九月になると九十三歳とか。これはこれは大往生間違いない。永遠の昼寝とはこの世を超えた途方もない生き方だ。

雪嶺集・前山集から推薦候補作をあげる。

万緑叢中万年筆のインク切れ 国見 敏子

友の骨拾へば夏至の夕日かな
流星に間近く生きて伊那の人
篝火の如く荒野の花萱草
ミロ展を出て七月の空に翅
少しだけ無理して暮らし夏念仏

堤 保徳
古畑 恒雄
久保美智子
桂木 節子
長崎 玲子

答えより問いを持つくらしとは

答へより問いを持ちたし雲の峰 高橋 節子
未知への挑戦。生きる姿勢が未来志向ですばらしい。毎日
は停滞がち、こうはいかないが、明日への課題をもちたい
もの。同人集のへ水打つや夕日のほどけゆく匂ひも佳句。

今月の秀句

細波は蟬の揺りかご雲は幌 池間キヨ子
宮古島の作者。蟬は草蟬であろうか。蟬にとり、海の
さざなみは「揺りかご」、空の「雲」は大きな幌だとい
う。自然の一枚の大きさを揺りかごに、幌にデザインした
スケールの大きさに圧倒された。東シナ海と太平洋、天
空はひとつ。日本の南島にはこんな自然がある。感動
し、目頭が熱くなる。

草の穂がどつと喜び電車来る 森 千恵子

句の動きが美しい。草の穂が揺れてうれしそう。鄙の電
車。

海霧や火の輪郭をもつ鴉 岩上 諒磨

海霧の中の火の鴉。出雲神話を連想した。神話と一体の風
土が見えるようだ。鴉は日常と非日常の境に生きる鳥。

空の奥より螢火の殉教者 青山 篤司

例えば長崎の殉教のクリスチャンを思う。「螢火」は比喩、
季節感は薄い。空気のような存在に化した聖者である。

岳の幟赤子の名前記しあり 田中 純子

雨乞いの「岳の幟」の例句として珍しい着眼である。

蚯蚓ほどに渴きてさぐる明日かな 海野 良三

「渴きてさぐる明日」がいい。必死の生き方に感銘した。

緑摘むたび見上げたる鳶の空 赤澤 久喜

原句「緑摘む見上げる空は鳶の空」を添削。松の蕊を摘む
庭師仕事の動きに無駄がない。「空」の重複は省く。

浮世絵に三味線を弾く金魚かな 竹岡みち子
金魚にして、粹なことこの上なし。吉原あたりの金魚大夫
か。北斎描く化物であろうか。意外性が暑中に涼味を呼ぶ。

苺を食べに行くだけでも勝負根性がある。世は息詰まるほ
どの競争社会。疲れよう。俳句が救い。この気分はよくわか
る。そんなに考え込まないで、日常にどのような余裕を作り
出すか。こんな思いを持つ者が多いことをお忘れなく。

昼寝覚机上のパンチ穴きれい 市原 啓子

昼寝の間に誰かが紙にパンチを入れてくれたのか。昼寝前
の仕事であったのか。目覚めは新鮮。ささやかな感動がうれ
しい。同人集のへ蜘蛛の巣の空つぽ地球更新へも感心した。

金の蕊内に黄薔薇の類れぬ 薫原 説子

黄薔薇は金の蕊からはらはらと崩れるのか。美しいものの
関り類れるときのさまを象徴した句とも受け取れる。

羅や芯の強さが透けて見ゆ 谷口とし子

羅を纏う夏は羅に身の内側が透けて見える。飛驒高山の女
性の矜持が伺え、住斗南子さんの顔が浮かんだ。

青雲集

夜濯や明日着る服を選びかね 宮澤 朝子

季語との取り合わせが素朴。ここから飛躍が生れる。戦後
は着た切り雀であった。いま洗っている服を乾かして着て。

薄明のその手にもつは紫蘭かな 二木 暖

「紫蘭」が幻想的。どこか世紀末の西洋の匂いがある。

薔薇よりも薔薇育ててる君が好き 菊池理津子

美の探求者か。「育てる」ことは心の余裕がないとできな
い。愛とは余裕がないと長続きしないものだ。

岳集・青雲集から推薦候補作をあげる。

曝されし季語といふ季語広島忌 依田 ひろ
我が影は煤の色して徹くさし 珠凧 夕波
語り部の椀の百年終戦忌 今井 愛子
太宰忌や紙一枚の落し蓋 垣内 みか
夏立てる山河従へ太古墳 宇佐見房司
夏の川尻浮かせてはならぬ 山崎 妙子
地を叩く此の夕立の周防ぶり 玉木 愛子
水母食ひ骨柔らかくなりけり 小谷 一夫
かき氷崩れてだらしなき暮し 宮西 秀貴

